

小牧・長久手合戦陣立図

じんだて



(小松寺蔵・部分)

図書館西側の窓から目前に見える小牧山は、今を去る 435 年前の天正 12 年 (1584) 3 月から 4 月にかけて、徳川家康と織田信雄の連合軍と、羽柴秀吉軍との間で起きた「小牧・長久手合戦」で家康の本陣が置かれたところです。

1. 小牧・長久手合戦の概略

信長なきあと、権勢を増す秀吉と不和になった織田信雄は、徳川家康に支援を求めました。家康は主家の織田氏を助けるという大義名分をもって、3 月 13 日に信雄の清須城へ 1 万 5 千の兵を率いて入ります。同日、秀吉軍の池田恒興は犬山城を奇襲しますが、17 日、森長可は羽黒の戦いで破れます。これを聞き 27 日に秀吉は 3 万の兵を率いて大垣から犬山に入りました。一方、家康は榊原康政に築壘を命じ、小牧山の防御を固めさせました。秀吉は小牧山を包囲するように二重堀、岩崎、小松寺山などの砦に武将を配置させました。

28 日、家康は小牧山に入り山頂に本陣を置き、両軍のこう着状態が続くなか、秀吉軍の池田恒興が、家康の本拠地岡崎を奇襲するように進言し、4 月 6 日、支隊を編成し長久手方面に向かいました。しかし、この動きは家康軍の察知するところとなり、9 日、長久手で激突したのです。この戦いで秀吉軍は池田、森らの大将を失い、兵を引き上げ、家康も戦いを避け小牧山に帰りました。以後、両軍は戦わず 11 月に和解しました。

2. 陣立図の解説（説明は『愛知県史資料編 12 織豊 2』付録・鑑賞の手引きより引用）

陣立図は『愛知県史』資料編 12 の付録より、二種類の「陣立図」を展示します。陣立図とは、軍勢の配置や戦闘の経緯、地理的な条件などを書き込んだ絵図のことです。

「小牧・長久手合戦陣立図」（小松寺蔵）原本は縦 79.5cm 横 156.8cm

東を上に見、犬山城から岩崎城までの範囲を収める。3月の両軍着陣から4月9日に至る両軍の動き、長久手での対陣の状況をあらわす。左下部に大きな欠損がある。右下部の書き込みにより、原本は、南龍院殿すなわち紀州徳川家初代頼宣の命で、「御年譜」（「創業記考異」、寛文12年（1672）の完成）の挿図として製作され、紀州東照宮や将軍家に献上されたものであることが判明する。小松寺の図は、それを写したものである。

「小牧・長久手合戦陣立図」（小牧御陣御進発之図、和歌山城市管理事務所蔵）縦 102.4cm 横 227.0cm

東を上にし、犬山城・小牧山から岩崎城までの範囲を収める。やはり3月の着陣から4月9日の長久手での戦闘に至る両軍の展開を描く。左下隅の貼紙から、享保18年（1733）の成立であることがわかる。そこに「書写」とあり、書込みの短冊に空欄があることなどからも、別に原本が存在した可能性が高い。和歌山城天守閣に寄贈された資料のようだが、詳しい伝来は不明である。

当館の「象山文庫」には津田忠助が収集した小牧・長久手の戦いに関する資料があります。そのうち○は「小牧近世文書研究会」により翻刻された資料です。●は名古屋大学による撮影データからの複製です。

- 長久手岩作古戦場記 〈AK261/ナ/和〉
- 長久手義戦記略 〈AK261/ナ/和〉
- 長久手合戦 〈AK261/ナ/和〉
- 甲申戦闘記 全 〈AK261/タ/和〉
- 長久手日記. 小牧陣所之覚. 合本 〈AK261/ツ/象〉

◎小牧山城史跡情報館「れきしるこまき」オープン予定！

小牧山のふもとに4月25日に史跡情報館「れきしるこまき」がオープンします。近年の発掘調査で明らかとなった織田信長が築いた石垣や城下町、小牧・長久手の合戦など、小牧山を取り巻く歴史を、模型や映像を使ってわかりやすく紹介する展示など、小牧山に関する最新の情報をお伝えする施設です。ご期待ください！
